



高村玄太郎

吉本隆明

増補決定版



春秋社版

高村光太郎〈増補決定版〉

一五〇〇円

昭和四五年八月一五日 増補決定版第一刷発行
昭和五二年九月三〇日 増補決定版第六刷発行

著者 吉本隆明 よしもと たかあき

発行者 田中弘吉

印刷所 港北出版印刷

発行所 株式会社 春秋社

東京都千代田区外神田二一八―六
電話 (〇三) 二五五―九六二一
振替口座・東京 八二四 八六一
郵便番号 一〇一

目次

高村光太郎……………三

「道程」前期……………五

「道程」論……………三七

「智恵子抄」論……………六二

詩の註解……………八一

戦争期……………九五

敗戦期……………一三七

戦後期……………一四一

小論集……………一六三

「出さずにしまった手紙の一束」のこと……………一六五

詩のなかの女……………一六八

高村光太郎鑑賞……………一七〇

高村光太郎の世界……………一七六

高村光太郎私誌……………一八八

春秋社版『高村光太郎選集』解題……………二〇三

一 端緒の問題……………二〇五

二 自然の位置……………二二一

三 成熟について……………二二七

四 崩壊の様式について……………二五二

五 二代の回顧について……………二六二

六 高村光太郎と水野葉舟——その相互代位の関係……………二七五

七 彫刻のわからなさ……………二九三

年 譜……………三〇五

参考文献目録……………三三六

あとがき……………三三九

初稿掲載誌一覧……………三三二

高
村
光
太
郎

「道程」前期

高村光太郎には、明治四十三年（一九一〇）以前に、詩集「道程」にいなかった数篇の詩がある。

「秒刻」、「マデル」、「豆腐屋」、「博士」、「あらそひ」、「敗鬬録」などである。それ以前にさかのぼると、二百七十首ほどの短歌作品がある。時代的にいえば、短歌作品はおおむね欧米留学までの作品であり、「道程」未収録の詩は、がいて渡米中の試作品である。「道程」未収録の詩は未熟なために高村が「道程」に加えなかったのだろうが、短歌作品から詩へうつってゆく過渡的な模索が、どう行われたかをしめしている。しかしそれよりも重要なことは、欧米に留学しなかったならば、歌人高村砒雨（篁砒雨）が詩人高村光太郎に転換することはなかったことを、この未収録の詩が暗示していることである。高村は、後に留学中ボードレールやヴェルレーヌの詩に接してみて、はじめて詩とはかくのごとき自由な表現ができるものか、と納得したといっているように、欧米の近代詩にふれて、短歌から開眼の機をつかんだのだが、同時に、詩によって「安全弁」的にはき出さねばならなかった、生涯の内面的なモチーフを、欧米留学によってはじめて背負わされたといえることができる。「道程」未収録の詩は、作品としては、過程的な模索にすぎないため、いふべきことを、無形の形式的な制約にしばられて、よくいえないでいるもどかしい作品だが、内面的なモチーフからみれば、「道程」の初期作品とまったく地つづきであるということができ、そのために「道程」前期にふくめて、独立してあつかわねばならない問題をふくんでいる。この「道程」前期は、欧米留学が、高村光太郎の生涯にあたえた意味を暗示する時期にあたっている。

高村光太郎が、欧米留学からかえったのは、明治四十二年六月である。あたかも、幸徳事件の突発する一年前であり、近代日本は、はじめて労役大衆の反抗運動を体験しつつあるさなかであった。高村光太郎は、生涯にわたって、いわゆる社会運動に投じることのなかった詩人であるが、また、同時に生涯、大衆にたいするシムパッシーを捨てなかった詩人であった。幸徳事件前後の物情は、高村にどんな社会的見解をも構成させていないのであるが、それにもかかわらず、何故、幸徳事件によって何の影響もうけなかったのかを解明せざるをえないものを、高村光太郎の生涯は背負っている。

高村が社会運動に投じなかったのは、ひとつの撰択であり、大衆にたいするシムパッシーを失わなかったこともひとつの撰択であった。この生涯の撰択を、まず幸徳事件によってテストしなければならなかったのが新帰朝の高村光太郎であった。わたしは、「道程」以前の詩作品をかんがえたうえで、欧米留学がえりの高村光太郎を、幸徳事件前後の情勢につきあててみなければならぬとおもう。明治四十三年五月二十五日、宮下太吉たち四人の社会主義者が、検挙されたのをきっかけにして、いわゆる大逆事件はおこっている。すでに、明治四十年二月には、足尾銅山に暴動がおこり、幌内炭鉱、別子銅山にまで波及している。また、一方では、日本社会党の結社禁止事件、赤旗事件などが相ついでおこり、幸徳秋水たち、革命的サンディカリストが次第に急進化してゆく動向と、「彼の危険なる社会主義者を拘束せん」と機会をうかがっている政府の弾圧政策とが対峙していた。日本社会党が、結社禁止をうけたのは、おもに、幸徳が、第二回大会でやった議会主義を排して労働者の直接行動によって、社会主義を實現しなければならぬ、という演説のためだとされており、このときから、幸徳たち社会主義者中の急進派は、官辺から抹殺されるべくつけねらわれていたということができる。幸徳事件にまでゆきついた「三十四年前から荒々しくやつてゐた革命騒ぎ」（御風）は、日露戦争後、日本の社会が急速に膨脹しなければならなかったところに、すでに胚胎していた。

このとき、日本の資本制生産は、明治三十年代末期から四十年代を中心に、軽工業から重工業の優位に移りつつあり、製鋼工業は発達して、独占的なカルテル、コンツェルンが、はじめて結ばれるとともに、桂内

閣の保護下に、はじめての金融シンジケートが設立されつつあったのである。この独占的な段階へうつってゆく社会的な過程で、日露役の戦費を背負ったままの戦後の大衆はよろめかざるをえず、そのうえ、四十年代にはいつてから、恐慌と物価高がつづいたため、もっとも苦境にさらされた労役大衆と、もっともこの社会的な動向をするどく洞察した革命的サンディカリストの一群とは、反抗にただざるをえなかったのである。幸徳事件にいたるまでの一連の事件は、日本の資本制を専制的な保護によって飛躍させようとした政府が、この反抗を、しやにむに封殺する必要にせまられたとき、当然、突発せざるをえなかったということができよう。

文学的に、この社会的な動向を、いちばん鋭敏に受感し、苦悶をよぎなくされ、そのうえ、幸徳事件をさかいて決定的な方向変換をせまられたのは、自然主義文学運動であった。自然主義文学運動が幸徳事件からうけた打撃は、おそらく個々の文学者たちがうけた衝激の問題をはるかにこえていた。明治四十四年十二月の「早稲田文学」がこころみた「今年の文芸界に於て最も印象の深かつた事」というアンケートのなかで、戸川秋骨は、自然主義がおとろえ、それにかわって耽美的な傾向が興隆する徴候を指摘しながら、そのよってきたる原因を、「つまり前内閣が政府として持つて居る全ゆる方法、所謂官憲の威力を濫用してたとへば自然主義と言ふ様な思想を一種の危険なものであるかのやうに考へ、それに依つて折角発達しかかつた文芸を滅茶にした」ところにもとめている。秋骨によれば、快樂主義的な傾向が、文壇を支配するようになったのは、この弾圧の反動にほかならなかつたのである。

もともと、文学的な傾向が、うつてゆく原因が、こういうところにきわまるとはいいいくとしても、不可避的な時代的動向を指摘した秋骨は、おなじアンケートにこたえた他の自然主義派の論客、作家にくらべて、卓抜であつたといふことができる。自然主義文学は（すくなくともその文学理論は）、秋骨の指摘したとおり、幸徳事件を絶対の壁として、おしまげざるをえなくなつた。たとえば、田山花袋は、はっきりと幸徳事件を勘定にいれて、その「描写論」のなかでかいてゐる。「排理想、排道德、これを実行の上から言へ

ば、到底絶対に行はるべきことではあるまい。生存を捨ててまでも、吾々は理想を排し、道徳を排することは出来ないものである。実行上に、新しい道徳を提擲し、旧い理想を排却するのは、それは好い。私などもさうした人間でありたいとは思つてゐる。しかし生死を賭してまでもといふ段になると大に考へなければならぬ。」花袋は、すくなくともここで、まかりまちがったら生命を奪われるかもしれない、という恐怖感だけは、幸徳事件からうけとっている。花袋の正直な迷懷のうちに自然主義文学者がうけた刻印は代表されたのである。花袋は、壁にぶつかつてもがく昆虫か何かのように、諸君はその忌憚なき描写の陰に、作者の悲痛なる主観の悶えを見なければならぬとし、実行を敢てしない忍耐と知識の間にうまれた傍観的態度によって、はじめてライフが明らかに描かれる、という無惨な結論に到達している。ここで花袋がとなえているのは、いわば客観的描写の観照化ということであり、実行と芸術とをべつだん意識だてずに、現実描写が排理想、排道徳に通じることを確認してきた花袋ら自然主義文学者は、幸徳事件に強迫されて、実行と芸術とを二元的に分離すべきことをせまられた、ということができる。自然主義は、幸徳事件によって、客観描写の観照化か、内在化かの岐路にたつた。かれらがあと一步をすすめるためには、若い啄木が指摘したとおりに、客観描写を内在化（主体化）するほかはなかつたはずであつた。

しかし、花袋とおなじように、たとえば天弦は、物質的的人生観の圧迫にたえてもがき苦しむ主観の力を、ネガチブにおもひえがかねばならなかつたし、抱月は、個人の力の及ばぬところの、ある一つの何だか分らないが、とにかく我以外の大きな力がチャンと定まつてしまつているところに、宿命観をつくりあげねばならなかつたのである。花袋の傍観描写論にしろ、天弦の主観のもだえにしろ、抱月の宿命観にしろ、そこに自然主義理論の必然的な方向にないまぜられた幸徳事件の壁をかんがえずには理解することはできないものである。秋骨の指摘したようには、うまく偶然と必然とをふりわけることができないとしても、幸徳事件を転機として、自然主義が屈折せざるをえなかつたのはあきらかであつた。合理と非合理とが、封建と近代とが、頭も尻尾もなくからみあつていような、日本の家や、生活や、社会的な環境や、そこからうまれてく

醜美な人間關係に密着し、これを描きつくそうとする生まじめな、オーソドックスな努力は、自然主義の屈折とともに、主線からしりぞいたのである。白樺派の、庶民社会を素通りした汎ヒューマニズム風の自我思想と、新思潮、三田文学、スバル派の庶民社会に背中をあわせてねころんだような耽美的、新ローマン的な文学とが、文学的な主線にかわった。

当時、スバル派の一隅にあった石川啄木は、自然主義の衰弱と、スバル派、白樺派の興隆をうながした四十年代はじめの時代的な危機を、幸徳事件の突発とその終末とのうちに、洞察しつくした唯一の詩人であったということが出来る。「時代閉塞の現状」は、その洞察の記録にほかならず、自然主義者が、かならずつき当るはずのものを、さけて、「傍觀的描写や主觀のもたえや宿命觀に向わざるをえなくなつたのが、あまねくゆきわたつてしまつた強権の力そのものであることを指摘」して、明日への考察、その組織的考察の必要を力説したのである。啄木の「九月の夜の不平」(明治四十三年十月創作)は、おそらく身近の「スバル」派の文学者との内面的訣別の記録であり、「時代閉塞の現状」をかくにいたつた動機の自白であつた。

秋の風 我等明治の青年の危機をかなしむ顔撫でて吹く

時代閉塞の現状を奈何にせむ 秋に入りてことに斯く思ふかな

幸徳事件の卓抜な記録「日本無政府主義者陰謀事件経過及び附帯現象」をかき、幸徳が担当弁護人にあつた書簡を、万感のおもいをこめてうつしとつた啄木の晩年のコースは、明治四十年代はじめの社会的動向と、それにとまなう自然主義の転換の意味を、洞察することによって決定されたのである。

スバル派は、その時、啄木と比肩しうる近代意識をもつた二人の詩人、高村光太郎と木下杢太郎を擁している。杢太郎は、「和泉屋染物店」をかいて、封建情緒と異国趣味に蕩尽していた近代意識をかきたて、足尾銅山事件から幸徳事件までの一連の事件を、作品のなかにくりこんでみせた。この戯曲で、一連の事件

や、税金と不景気で沈滞した世相が、劇構成の素材としてとり入れられているだけだ、という説はかならずしもあたっているとはおもわれない。李太郎は和泉屋染物店ののれんに封建情緒を託し、息子の「幸一」に近代意識を託し、出奔中の息子が異様な帰宅をし、去ってゆく短い時間に、和泉屋がかもす情緒の騒乱によつて、四十年代の薄暗い眠ったような庶民社会の俗情と、自己の近代意識の落差をさぐろうとしたのである。もとより、李太郎にそれを強いたのは、幸徳事件があたえた衝激にほかならなかった。わたしは、べつに素材のアクチュアリティが、内的なアクチュアリティの反映だという素朴な考えに同じることはできないし、そこに文学的な優位をみとめようとはおもわない。幸徳事件を、作品にかきこむか、かきこまないか、などは好奇心の所在の問題にすりかえても何程のことがあろうかとおもっているのだ。啄木や李太郎とまったく異質の反応を幸徳事件にせしめた高村光太郎の近代意識の特質を、この時代的背景をかりて追求しようとするモチーフが、働く理由のひとつもそこにある。高村は、「早稲田文学」、明治四十四年四月号にかいた「三月七日」の日記で、李太郎の「和泉屋染物店」にふれている。

（前略）余の母の病氣は、余の我がままの爲めに、治る処も治らないでゐるのであらう。余とても悲しけれど是非なし。父は学校に出た。

余は父母の家にありながら、心のうち寂寥に堪へがたし。余は極端な我儘者となつてしまつた。余の心は、閉ぢられた烟突の中に苦しむ烟の様な痛さを味はつてゐる。コオルタアにでもなれ。勝手になれ。

マラルメの「マネエ」論を読む。

相変らずの自炊生活は、單調だけれども興味は深い。些細な食物でも自分の頭の働いてゐるものと思ふと満足が出来る。恐らく余の造るビステキは天下一品だらう。

午後になつて風がやや寒くなつて来た。「ベッド」を直し、室の掃除をやつてから、画きかけの「夜の凌雲閣」を画きつづける。夜の空とタツチとを幾度画き直すかわからず。色は重なり重なつて不思議なも

のになつたが、タツチが氣に入らず。動いてゐる闇黒の空氣を描くには、もつと大胆でなければ駄目だ。あの夜の色を眺めに浅草に御百度を踏んでゐたが、此頃は月が大きくなつて空が淡綠色になりかけてしまつた。

三時頃ひと休みして、紅茶をへれながら、木下李太郎氏の「和泉屋染物店」を読んだ。つい釣り込まれるほど面白いものだつたが、「おさい」を使ふやうなテクニクが馬鹿に目立つて「ギニョオル」式に見えた。しかし、しんみりした、雪のつもる音の様な情趣の漲つてゐるところがうれしい。再読を要する事として、又作画にとりかかる。本式の画室でないから光線の都合の悪い事甚だしい。画を見るには台の上に椅子を載せて、其の上へ上つて見下ろさなければならぬ。画架が木炭画用のだから、がたついて凌雲閣が倒れ相だ。本式の画室を建てるには遊んでゐる金が三千元は無ければ手も出せない。親爺に相談するのも強腹だから無期延期とする。相場でも儲けたらおつ建てよう。(下略)

ここには、雑多な問題が、はめこまれてゐる。第一に、李太郎の「和泉屋染物店」の素材的な関心は、素通りされてしまつてゐる。また、とじられた烟突の中にくるしむ烟のような心境が白状されてゐるかとおもふと、すぐあとで、「恐らく余の造るビステキは天下第一品だらう。」という料理自慢がかかれてゐる。その隣りに、マラルメのマネエ論が読まれ、「凌雲閣」の絵がかかれてゐる。画室の光線が氣に喰はぬ、親爺から金をもらうのは業腹だから、相場でも儲けたらおつ建ててやろう、というセリフがある。洋行がえりでお高くなつた息子が、父親に寄食しながら、とりとめのないことをかき散らしているにちがいない。幸徳事件も何もない。おれの造るビステキは天下第一品だらうぜ、というセリフが「三月七日」を支配しているのだ。李太郎が、作劇上からはあまり巧みだともおもえないセリフを「幸一」に喋言らせたりしたところは、この息子の内面を素通りした。「全く——こことは全く違つた世界から私は來たのです。それからまた全くの違つた世界へ之から行くのです。今迄の奴隷の生活から出て、始めて新しい自由の世界へ行くのです。唯私達は、

何にも考へないで、自分達の便利の爲め許りに、何時までか古い因襲を護つて行かうと云ふ傲慢な人達を憎んだ許りです。所がそんな人達は権力と云ふものを持つて居るのですね。ですから此方も其代りに心の革命といふ武器を選んだのでしたよ。そしてまづ手始めに鉦山の、あの無智な二万人の眼を開けてやらうとしたのです」「今度東京で捕つた私の友達だつてえらい人なのです。それを世間が罪人にしたのです。」しかし素通りされたセリフが舌たらずの新知識であり、このセリフをうけとめている「和泉屋染物店」ののれんの下が、三味緑的なふんいきにすぎないとしたならば、この洋行がえりの息子の無関心は、かならずしも単なる無関心とばかりいうことはできないし、そのお高くとまって父親に寄食している息子の捨て鉢なせりふは、かならずしも無意味とはいえないのである。「和泉屋染物店」くらしいの作品には、それ相当の儀礼的な感想を呈するのが適當であつたのかもしれない。高村は、その頃、世評のたかかつた白秋の詩集「思ひ出」を評して、ただひとり、多くの矛盾と重圧とに堪えきれない今の世の空氣の中で、追憶は一種の避難所であるとのべるすべをしつていた。「スバル」左派の啄木は、おそらく全身から幸徳事件に震憾されたひとりである。右派の李太郎は、すくなくとも、芝居のモチーフとする程度には、幸徳事件に関心をしめた。かりに、中間派たる高村は、まったく幸徳事件を黙殺し、その当時の日記によれば、一介のシレッタントたる生活において、おれのビステキは天下一品たることを誇り、相場で一儲けしたら画室をおつ建ててやろうとかいた。高村は、啄木とともに、芸術理念的に、スバル派のなかでは、新思潮、三田派よりも、自然主義派に、親近のこころを示した詩人であつた。わたしは、高村のシレッタントたる資格に、なお、掘り上げられるに価する可能性をみとめたいとかんがえる。

わき見出しに、「巴里より」とかかれた高村の「出さずにした手紙の一束」が発表されたのは、明治四十三年七月の「スバル」である。欧米留学からかえつて、ちょうど一年、幸徳が検挙されてから一カ月後にあつてゐる。意識しないままに、あるいは意識されたうえで、幸徳事件によつてさらけ出された日本の社会の暗黒、天皇制を幹としてはりまわされた壁に、密封されている社会の暗黒と、そこで、へしまげられ

ざるをえなかった文学の動向にたいして、この未投函のまま留学からもちえられた手紙の一束は、対峙すべきモチーフをさらけ出したものであった。この外見上のシレッタントが、内面において何をかながえているかを、はっきりとしめすものであった。まず、第一のモチーフは、芸術上の係累と血統上の係累とが、矛盾し葛藤している深層の問題であった。

「身体を大切に、規律を守りて勉強せられよ」と此の間の書簡でも父はいつも変らぬ言葉を繰り返してよこした。外で夕飯を喰つて画室へ帰つて此の手紙を読んだ時、深緑の葉の重なり繁つた駒込の藁葺の小さな家に、蚊遣りの烟の中で薄茶色に焼けた石油燈の下で、一語一語心の底から出た言葉を書きつけられてゐる白髯の父の顔がありありと眼に見えた。僕は其の晩 *monnartie* の×××女史を訪ねて一緒に *regent* といふ不思議な珈琲店に行く積りで居たが、急に悪寒を覚えて、其方は電報で断り、ひとり引込んで一晩中椅子に懸けたなり様々の事を考へた。親と子は實際講和の出来ない戦鬪を続けなければならぬ。親が強ければ子を墮落させて所謂孝子に為てしまふ。子が強ければ鈴虫の様に親を喰ひ殺してしまふのだ。ああ、厭だ。僕が子になつたのは為方がない。親にだけは何うしてもなりたくない。君はもう二人の子の親になつた相だな……。今考へると、僕を外国に寄来したのは親爺の一生の誤りだつた。「みづく白玉取りて来までに」と歌つた奈良朝の男と僕とを親爺は同じ人間と思つてゐたのだ。僕自身でも取り返しのかぬ人間に僕はなつてしまつたのだよ。僕は今に鈴虫の様な事をやるにきまつてゐる。Rodin は僕の最も崇拜する芸術家であり人物である。が、若し僕が Rodin の子であつたら何うだらう。此を思ふと林檎の実を喰つた罪の怖ろしさに顫へるのだ！

さきに森鷗外の留学があり、夏目漱石の留学があり、同時期にも永井荷風の留学があった。留学というのは後進社会の特産物であつて、そこに、さまざまな後進国の優等生が演じるさまざまな内的なドラマが象徴

されるはずである。わたしには、そういう準備がないが、留学の実態を追及してゆけば、かならず思想的転向のさまざまな実態があきらかになるはずである。×××女史と、おもしろい珈琲店へ遊びに出かけようとする高村が、日本、東京、駒込、のちつぽけなあばらやから、フランス、パリにあてた「身体を大切に、規律を守りて勉強せられよ」という手紙をうけとったときの衝撃は、父親が夜の目もみずに稼いだ金をだましとって、ブルジョワ息子と遊び呆ける貧乏人の息子の心理と同じものであった。もちろん、芸術というものに豊富な物質的基礎と、閑暇のうえにしか開花しないものであるとするならば、芸術を志す貧乏息子は、りちぎものの父親の金をだましとって、ブルジョワ息子を範とするよりほかない。それでは、自分はおよばぬまでも、息子だけは——という発想をするこの父親は、否定されねばならないか。むろん、そのいい、心理が否定されねばならないのだ。わたしのみるところでは、あからさまにこの問題にぶつかった留学は、近代文学史のうえでは、高村光太郎だけであった。おおくの学問的留学と芸術的留学と遊び人的留学のあいだで、社会的留学をやったのは一介の歌人・美術学生であった。この貧乏息子は、いじらしすぎる父親を否定するとともに、ブルジョワ息子にも昂然と対峙しなければならなかった。高村に父親—息子のコンプレックスをつきつめさせたものは、西欧と日本との眼もくらむばかりの文化と社会と人間意識との落差であった。ここから、ロダンを芸術家とすれば、父光雲は職人であり、ロダンを芸術上の血族とすれば父光雲は憎悪すべき敵であり、しかも、光雲と自分とは、肉親の父と子であるという宿念がうまれざるをえなかった。このような宿念からは、種の問題が誕生する。高村は、ロダンは西欧近代の嫡子であるが、自分はどうしようもない辺疆の異人種であるという劣等感からも、腹背をつかれることになった。この種の問題は、ただたんに文化的落差の自覚からもうまれるだろうが、父と子の排斥をくぐることは、多くの留学がたどらなかったとおもわれる径路である。おなじ「手紙の一束」のなかにかかっている。

独りだ。独りだ。